

論文
紹介酒と泪と煙草と多重がん!?
—アルコールとタバコの交互作用—

田淵 貴大

大阪府立成人病センター がん予防情報センター



地域および院内がん登録データを活用した疫学研究成果を発表することにより、がん患者さんや臨床現場へ予防につながる情報提供を行うことを目標にしています。International Journal of Cancer誌に最近掲載された拙論文の内容について紹介させていただきます。

がん患者の生存期間が延びるに伴い、続発がんの数も増えており、がん患者の5-15%に続発がんが生じています。今回、がんの部位に関わらず、飲酒と喫煙が続発がんの発症に及ぼす影響を調べました。大阪府立成人病センターで1985年から2007年の間にがんと診断された20-79歳の者を対象とし、がんの診断後10年まで(2008年末まで)追跡し、続発がんの発症リスク比を計算しました。大阪府地域がん登録のデータからも続発がんの情報を収集しました。がん診断時の飲酒・喫煙状況について問診表および診療記録から収集しました。アルコールを1日当たり2合以上飲む者を多量飲酒あり、1日20本以上喫煙する者をヘビースモーカーと定義しました。

27,762人のがん患者において1904件の続発がん(全部位)、飲酒関連の続発がん(口腔・咽頭、食道、大腸、肝臓、喉頭、乳腺)が702件、タバコ関連の続発がん(口腔・咽頭、食道、胃、肝臓、膵臓、喉頭、肺、腎・尿路・膀胱)が1163件認められました。

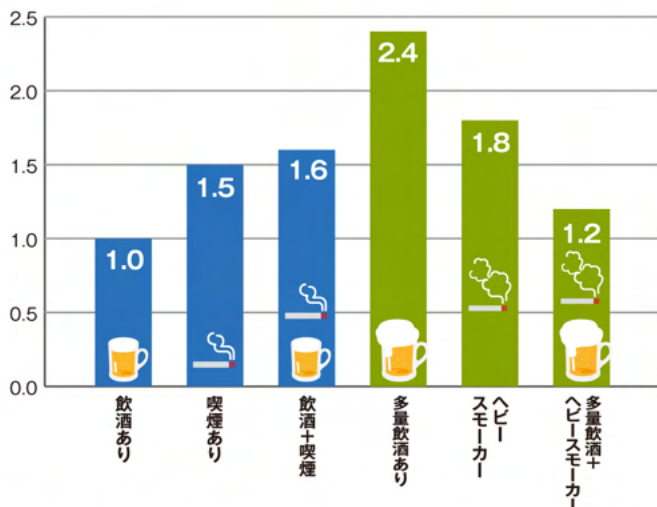


図1. 第一がん診断時の飲酒と喫煙状況(交互作用含む)とタバコ関連続発がんの多変量調整リスク比

(もともとアルコールを飲まない人およびもともとタバコを吸わない人を基準として)

▽抜粋してリスク比の結果を示します。もともと飲まない+もともと吸わない者よりも、多量ではない飲酒あり+もともと吸わないの方が続発がん発症のリスクが低い傾向にありました(日本の先行研究に一致するJ字型リスク)。飲酒と喫煙の交互作用を含む結果が図1です。

はじめのがんが診断された時に、ほとんど毎日もしくは機会飲酒する者は、タバコも吸うと(交互作用)、1.6倍タバコ関連続発がんになりやすい。タバコを吸わない場合には、飲みすぎなければ飲酒による続発がんリスクは低い(リスク比=1.0)。飲酒の有無にかかわらず、タバコを吸うと続発がんになりやすい。ヘビースモーカー(リスク比=1.8)やアルコールを1日当たり2合以上飲む者(リスク比=2.4)は続発がんになりやすい。研究結果からの結論が図2です。

がん患者さんに続発するがんを減らすために、

- ① 飲酒では飲みすぎない、もしくは止めること、
- ② 喫煙は必ず止めること、
- ③ 両方ありの場合、特に多量飲酒+ヘビースモーカーの者は続発がん発症のハイリスクグループですから、上記の行動変容を促すことが必要です!



図2. 研究結果からの結論・メッセージ

※居酒屋やタバコ店の人がリスクをもたらしているわけではありません(タバコ店や居酒屋パッシングを意図していません)。ただし、利権により人々を意図的に薬物依存へと誘導している産業界のたくらみにはご注意ください。(参考:タバコを歴史の遺物に タバコ規制の実際. 東京: 篠原出版新社 2009.)

論文紹介の貴重な機会を頂きありがとうございました。内容の詳細に関しては論文本文を御参照ください。最後に、地域および院内がん登録のデータ提供・管理・維持等に関わる全ての方に深謝申し上げます。